

平成 22 年 5 月 12 日現在

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2006 ～ 2009
 課題番号：18520239
 研究課題名 (和文) 古代ロシア文語萌芽期の最終期における言語特性について
 研究課題名 (英文) Research on the linguistic characteristics of the Old Russian Literary Language in its last embryonic stage

研究代表者
 岩井 憲幸 (IWAI NORIYUKI)
 明治大学・文学部・教授
 研究者番号：60193710

研究成果の概要 (和文) : 古代ロシア文語の萌芽期の最終段階あるいは成長期の初期段階を『イゴリ遠征物語』出現以前の 12 世紀初頭と措定し、ちょうどその頃 (1115 年頃) 成立の『ムスチスラフ福音書』のテキストを対象として、その言語的特徴を明らかにした。萌芽期の前・中期における東スラヴ語化の個別的・一次的生起からカテゴリーカルな生起への変容プロセスが進行していると予測され、この点を特に追求した。当該テキストの電子化と順引き・逆引き語彙索引の作成も試みた。2009 年度末に冊子体の報告書 (iii+167 ページ) を刊行し関係各位に配布した。

研究成果の概要 (英文) : From 2006 through 2009 we did philological research on the linguistic characteristics of the Old Russian Literary Language in its last embryonic stage, focusing on the text of *Mstislav's Gospels* written around 1115. This study is planned to improve our previous study of the Old Russian literary language in its embryonic stage which was carried out from 2002 to 2005.

We reexamined the text of *Mstislav's Gospels* and almost completed a computer-based text of *Mstislav's Gospels*. We also made several trial models of word-indexes including some reverse dictionaries. This research was summarized and published by Iwai from the philological viewpoint.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,000,000	0	1,000,000
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,200,000	660,000	3,860,000

研究分野：スラヴ文献学・古代教会スラヴ語・洋学・言語学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：古代ロシア語、ルシズム、古代教会スラヴ語、ムスチスラフ福音書、アルハンゲリスク福音書

1. 研究開始当初の背景

1995 年度以来、ロシア標準語の成立萌芽期の研究を続けてきた。1995 年度から 2001 年度には、『アルハンゲリスク福音書』(1092 年成立)を中心に据えて、上記の萌芽期を探らんとした。続いて、2002 年度から 2005 年度にかけては、『スヴャトスラフの文集、1073 年』に着目して種々の他文献との比較研究を行いつつ、萌芽の第二期と推定したこの時期の言語におけるハイブリッド性の多様さと重層性を探求した。

今回は、12 世紀初頭を萌芽の最終期ないし成長の最初期と推定し、1115 年頃成立の『ムスチスラフ福音書』を中心として、この時期の言語特性を研究することとした。

2. 研究の目的

古代ロシア文語とは、9 世紀にキュリロス・メトディオス兄弟によって創出された古代教会スラヴ語が、その後、10~11 世紀のキエフ・ルーシの社会にもたらされ、それが土地の言語、すなわち、東スラヴ族の日常の言語の強い影響を受けて生じた、ハイブリッドな文章語であるとされる。我々は古代ロシア文語の萌芽期に段階を推定し、その前・中段階につき『アルハンゲリスク福音書』(1092 年成立)と『スヴャトスラフの文集、1073 年』を材料として言語的特徴と歴史的過程を究明した。今回は、『イーゴリ遠征物語』出現以前の 12 世紀初頭を、古代ロシア文語の萌

芽期の最終段階あるいは成長期の初期段階とみて、ちょうどその頃(1115 年頃)成立の『ムスチスラフ福音書』のテキストを対象に取り上げる。この時期にあつては、萌芽期の前・中期における東スラヴ語化の個別的・一回的生起からカテゴリカルな変容へのプロセスが進行しているのではないかと予測され、このことを検証したい。また、それにより、古代ロシア文語成立の萌芽期最終段階の様相を明らかにしたい。

3. 研究の方法

1115 年頃成立の『ムスチスラフ福音書』がフル・アブラコスである点を活かして、マタイ伝およびヨハネ伝について、重出箇所を調査・検討する。それにより、重出テキスト内での不一致が確認されるはずであるが、この不一致の存在が、研究にとって、重要かつ有意義である。この重出テキストでの不一致の箇所に関して、伝統的 *verse* と改新・改変形式の取捨の様子、改新・改変形式のアブラコス内での分布傾向の問題(シナクサリオンにか、メノロギオンにか)、改新・改変形式とカノン内のシノニム・ダブレット、あるいは、シメオン帝期ブルガリアの用語、さらには、東スラヴ語独自の言い換え、などとの相互関係、といった諸問題を考察してゆく。

同時に、『ムスチスラフ福音書』テキストの電子化の完成も目指し、併せて、語彙索引(順引き・逆引き)の作成も行い、研究の実

際に役立てたい。

4. 研究成果

古代ロシア文語の萌芽期の最終段階あるいは成長期の初期段階を『イーゴリ遠征物語』出現以前の12世紀初頭と推定し、ちょうどその頃(1115年頃)成立の『ムスチスラフ福音書』のテキストを対象として、その言語的特徴を明らかにした。萌芽期の前・中期における東スラヴ語化の個別的・一時的生起からカテゴリカルな生起への変容プロセスが進行していると予測され、この点を特に追求した。

『ムスチスラフ福音書』がフル・アプラコスである点を活かして、四福音書全部について、重出箇所を調査・検討した。それにより、重出テキスト内での不一致が確認されたが、この不一致の存在が、研究にとって、重要な意義である。

この重出テキストでの不一致の箇所を精査して以下の諸点を明らかにした。重出テキストにおいては、伝統的 *verse* と改新・改変形式の取捨に関し、一方において伝統的 *verse* を保ち、他方では改新・改変形式を取り入るという傾向を確認した。また、アプラコス内での分布傾向では、メノログイオンに改新・改変形式の多発を認めた。改新・改変形式の実際は、まずは、カノン内のシノニム・ダブレットを用い、次の段階として、シメオン帝期ブルガリアの用語での置換がなされたと見受けられる。これが進んで、東スラヴ語独自の言い換えに至った例も存在した。動詞組織内では、文語としての過去の *form* 中、*imperfect* と *aorist* の混淆が進行している。

上記のような研究・考察から、『ムスチスラフ福音書』での重出箇所の多くは『ユリエフスキイ福音書』への連続性も実証しうるこ

と、また、『ムスチスラフ福音書』が『アルハンゲリスク福音書』(1092年成立)よりも一段次の段階上にあることも確認された。すなわち、『ムスチスラフ福音書』はキエフ・ルーシに蓄積されたキリスト教文化・学術のキエフ・ルーシにおける独自の展開のひとつの嚆矢である。さらに、カノンの推定は、人工的な推定とはいえ、重要であり、また、テトラとアプラコスとの語彙論的な違いも明瞭であること、『バニツァ福音書』はロシア写本との関連性をほのめかす箇所がある、等も明らかになった。

『ムスチスラフ福音書』テキスト全体の校正に関しても、また、その電子化に関しても障害となるような事例の解決策の具体例を一つ示せば、小詞 *zhe* の問題がある。*zhe* を小詞として独立させて綴るのか、*-zhe* という接辞として先行の語と一綴りにするべきなのか、この問題に関して、ジュコフスカヤ、アレクセーエフ、ザリズニャークらの先行諸研究は、あまり有効ではなかった。この問題、とりわけ典型的な例としては *jakozhe* の場合があるが、我々の研究では、一定の結論を得た。

『ムスチスラフ福音書』テキストの電子化は、ほぼ完成し、併せて、語彙索引(順引き・逆引き)の作成も行い、研究の実際に役立つ程度までの試作版が出来上がった。また、2009年度末に冊子体の報告書(iii+167ページ)を刊行し関係各位に配布した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

- ① 岩井憲幸、重出テキスト間に見る動詞のテンス差について—『ムスチスラフ福音書』マルコ伝、ルカ伝から—、『古代ロシア文語萌芽期の最終期における言語特性

- について』、査読無、2010、pp. 113-162
- ② 服部文昭、『オストロミール福音書』、『アルハンゲリクス福音書』、『ムスチスラフ福音書』—古代ロシア文語萌芽期における位置づけ—、『古代ロシア文語萌芽期の最終期における言語特性について』、査読無、2010、pp. 11-28

〔学会発表〕（計 0 件）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩井 憲幸 (IWAI NORIYUKI)
明治大学・文学部・教授
研究者番号：60193710

(2) 研究分担者

服部 文昭 (HATTORI FUMIAKI)
京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授
研究者番号：80228494

(3) 連携研究者

()

研究者番号：